

# ふるさと交友録

～伊藤 公平～ 12

「ふるさと」には、いろいろなひとがいる。この「交友録」では、月1回のペースで公平さんの“大切なひとびと”を紹介していただきます。



「落穂」の著者、新井三之助さん  
(改訂版・落穂より)

伊藤公平(いとう・こうへい)北見市在住、郷土史研究家。私設図書館「妻の風文庫」と「野草苑があでんきたみ」主宰。平成13年～20年、みんとに「ふるさと四方山話」「ふるさと・そぞろ歩る記」を連載。

話をオサム一家にもどす。

新井宇太郎さんは叔父・木暮彗太郎さん等の計らいで十町歩(十畝)の土地を得て懸命に働き、翌年の収穫期には八十円ほどの収入を得て郷里に錦を飾った。

明けて明治二九(八九六)年正月、正月の祝膳を前に宇太郎さんは無断の出走を詫びた上で、いかに北海道が有望の地かを語り、ぜひにも一家挙げての入植を力説した。第三之助さんの「落穂」には「(宇太郎さんが)熱心に奨め、母の後援効を奏して、父も移住を決意」したとある。

かくて宇太郎さん一家は、雑貨店を父・竹次郎さんの弟・多吉さんに譲り、家財道具その他不要なものは売り払って、その年の四月二日、上川郡鷹栖村字近文二線二号(現旭川市の護国神社近く)に転入して百姓となった。時に父・竹次郎さん四九歳、母・里さん三九歳、長男・宇太郎さん一七歳、次男・三之助さん十四歳と、九歳の長女、四歳の三男と、六人家族である。

「落穂」はいう。「吾等は元より…商業

より転農せるものなれば一般の農家よりは凡そ利害損失に鋭敏なる…故」、どのような作物の植付けが有利かと考えたとき、いちばんに目をつけたのが薄荷だった。価格の上下変動にやゝの不安はあるが、まずはやってみようと、近くの奥地に入植の山形県人吉田某から五畝(五ア)分の苗根を入手して植えた。

次いで馬鈴薯の低価格を見込んで澱粉製造を考えた。札幌村の澱粉工場が無賃で働きながら機械の構造、製造工程、流通の仕組みなどを学び、同三年春、丸太を伐り出して工場を建て、手廻しの製造機械を完成させたが、思いもしない手違いが生じた。安値を想定していた馬鈴薯が、入植者の急増で当座の食料となつて五倍以上の高値となり、うまく育ったはずの馬鈴薯畑が九月の大雨で水没腐敗してしまった。水利を考えて建てた工場も洪水に流されてしまった。

武家の商法ならぬ商家の農法は思わぬ挫折からの出発となった。